『発生の場』レビュー

徳永幸治

高い天井、広いガラスの側面の展示空間に４名の美術家が現代における芸術の新しい楽しみ方を見せている。
鈴木淳、チェ・ヨンファン、福田篤夫、上村卓大、それぞれの作風の違いだけでなく、作品と空間のバランスが絶妙である。

鈴木氏の作品は、体験する作品、動いている（動かす）作品、映像作品、それから骨董の磁器コレクションなど幅広い。それらの展示も床面から高所まで、また空間を斜めに横断したり、見る視線の移動も楽しい。
日常の中のテーマに見え方や切り取り方でこうも鑑賞する側の脳が違う回転を始めるのかと楽しくなる。

チェ氏の作品はソーシャルメッセージを壁面いっぱいから発散している。
段ボール、ビデオ、写真、アクリルの素材を平面ではなく立体的にコラージュし、異素材と多言語の文字での表現が作品テーマにあるように、異なるが似たような歴史をもつ隣国同士のせめぎ合いの様子を醸し出しているようだ。
また、美術館２階ブリッジから全体を見渡すとチェ氏の作品と鈴木氏のソウルに行った際に撮られた作品の向い合う配置がさりげなく意味ありげである。

福田氏の作品は、会場中央に仕切られた位置にある。
少し照明を落とした空間は、奥正面・右側面・左側面・手前正面に展示された作品から放たれる微妙な光りとその配列によって印象付けられている。
高価（世間で言う価値の高い）であろう金箔素材の作品は、奥正面に厳かに展示され、その両側面には和紙に銀箔と漆を用いた作品が見守っている。また振り向いて手前正面を見ると湾曲された銀箔の配列がこの閉じた空間の時空を曲げ、静かに主張している。この年代物の和紙と歳月の変化を感じさせない金箔・銀箔・アルミ素材の組合せもおもしろい。

上村氏の作品は、自分のお子さんが書いたもの、作ったもの、並べたものをそのフォルムのまま拡大すると、とても新鮮な感じを受ける作品表現となるのがなんとも不思議だ。
従来すでに在るモノを作品としてそのままの形で再現するとき、往々にして触らずともその重さや感触を分かったつもりでいるが、上村氏の作品はその先入

観をものの見事に裏切ってくれる。分かったつもりでいたものはいったい何だったんだろうか。そのギャップや日常とのずれがアート作品として楽しいものとなるのだろう。

大学構内の奥まった所にある校舎で、学生による作品展示がされている。
大学内マップが無ければわかりづらい場所ではあるが、お宝探しのつもりで捜し歩くのもいいかもしれない。いっそうの事、大学構内全域で作品を展示し、教室空間では納まりきれないアートの放熱の発生の場と化したら面白いかもしれない。また、ライブアートパフォーマンスを行ったり、新たな試みを大いにやって欲しい。また、学生の作品展示の際は、作品制作者とアートマネジメント専攻の学生との協同で企画・運営することがとても有意義なことだと思う。

地域に広く開かれた学問の場である大学は、その美術館も広くガラス面で側面を構成され外との視界を遮らず地域との距離を近しいものとしている。
その並びに同じくガラスで覆われた場所に、今回はアートカフェを期間限定で開催した。観覧後の頭に沸き上がった事、ココロに響いたことなどを語ってみようというもの。
普段からこの美術館によく来ている人からはじめて訪れる人、目的をもって来た人、たまたま通りすがりに立ち寄った方など様々。
そんな中でアートが地域に触れ合っているのは何とも嬉しいものだ。美術の専門家だけではなく、初めてアートの展覧会に来た人が、興奮気味に感想を話された事は、少なからずその方の心の豊かさの領域に及んだことだと思う。
アートが発生する場は、とりもなおさず見る側にとっても新たな感性の豊かさが発生する場でもある。